



# 謹賀新年

## 2020 元旦

### 新年のおめでたき植物たち

#### —商売繁盛に纏わる植物たち—

投稿：宮井 正彦

2020 年は「令和」初の元旦。うるう年であり、東京オリンピック開催年。誠におめでとうございます。

また、「子」と五行の「金」が重なる年であり、「金運」と「商売繁盛」の運氣溢れる令和二年です。益々のご繁栄とご発展を祈念申し上げます。

#### ○今年の干支「庚子」

「過去を顧みて刷新する局面にある年」です。「温故知新」でなく、「顧故刷新」と云った処かも知れません。

「十二支」では「子（ね）年」。「子」の字は物事の完了の「了」に、物事のはじまりの「一」が組み合わされ造られた漢字「子」であると云われます。全てが終わり新たな門出を意味するそうです。しかも「十二支」の廻っての最初の年であり、「平成」が終わり、新しい元号「令和」の門出には最も相応しいと謂えましょう。

さらに、「十干（じっかん）<sup>\*注1</sup>」は「庚（かのえ）」。「陰陽五行思想（説）<sup>\*注2</sup>」を加えると「干支（えと）」は「庚子（金の兒子；かのえね 訓読；こうし）」です。

「庚」は「金の兄（かのえ）」で、**結実、形成段階への変化**の意味を持ちます。

「子」は順に相手を生み出して行く陽の関係で、動物では「鼠（ねずみ）」に例えられ、ねずみ算式に増えて成長することから「子孫繁栄」と「世代を引き継ぐ循環」を意味します。また「**継続すべきことと改めるべきことを見直し刷新する局面の年**」という意味を含みます。

企業にとっては、「新たな局面に対応できる人材の育成と活用の取り組みが求められる年」でもあります。

## ○干支と植物の関係

「干支」は自然哲学の思想だから、十干と十二支は、ともに草木の成長に例えられるという共通点があります。

植物は、種から芽吹きますが、十干の最初の甲（こう・きのえ）、そして十二支の最初の子（ね・ねずみ）が種に例えられる。

今年（2020年）の干支「庚子（かのえね）」は、草木に例えると次のような状態を意味しています。

「庚」 → 草木としての成長が止まり、花を咲かせて種子を残す準備に入る状態。

「庚」という字は、臼と杵で穀物を搗いている形から来ている。臼と杵で穀類をつくと、米から餅ができるように、形が変化する様子を意味する。栄養成長を終えた草木が次の世代を残すために花や種を準備する繁殖段階に代わることを表している。

「十干」を植物の成長に例えると「甲から己」までは、種の芽生えから草木の栄養成長を終えるまで・「庚から癸」までは、花を咲かせ種を生み出すまでの時期を指す。

「子」 → 種子の中で新しい生命を育てている状態

十二支でも、最初の子（ね・ねずみ）が種子の状態に例えられます。亥年で結んだ種が、種子の中でいろいろな方向に育ち始める年です。

「庚子」には「草木（植物）が成長期から繁殖期に大きく転換する時期」を意味します。

「過去の成果の引き継ぐべきものと不必要なものを見定めて、新しい局面に入る体制を整える年」・「新しい時代、新しい自分への変化を遂げていく年」です。

万象において、今年は、過去の流れとは異なる新しい局面を迎えます。過去の価値観を

見直す「改善・改革・刷新」が求められますが、努力すれば、必ず実りある成果が得ら

れる年です。何せ「子（ねずみ）年\*注3」、さらには、五行の「金」だから・・・です。

## ○商売繁盛に纏わる植物たち

「正月のおめでたい植物」と云えば「松・竹・梅」です。【「松」；長寿や不老不死の象徴。「竹」；子孫繁栄の象徴。「梅」；高潔・純粋さの象徴】、それに加え「南天」（難転の象徴。）が思い浮かびます。古来より門松など正月飾りに欠かせない植物たちですが、今年は商売繁盛「金運の溢れる年」です。

「めでたき吉祥と商売繁盛に纏わる植物たち」を紹介致します。

①フッキソウ（富貴草、学名 *Pachysandra terminalis* 英名 Japanese spurge）

別名吉祥草とも呼ばれ花言葉は『吉事』『良き門出』『祝意』と誠に御目出度い。

ツゲ目ツゲ科フッキソウ属の常緑小低木。日本・中国北部が原産。Pachysandra とは、ギリシャ語の「太い(pachys)」と「雄しべ(andra)」から成る合成語で、この花の形に由来するという。4月～5月頃、10 cm程度の穂状花序の雌雄異花を着け、花序の上部が雄花、下部が雌花である。雄花は萼片から突出した太い4本の雄蕊を持ち、雌花には2本の花柱が目立つ雌蕊がある。花弁はない。常緑の葉が生い茂る様から「繁栄」の意味で「富貴草」と名付けられた。雌花が少なく着果率が極めて悪い。我が家の庭では実を着けたものを見たことがない。webから写真を引用した。

「フッキソウ」 2019.12/20 撮影 さいたま市



2020の雄花と雌花(2019の不稔脱落果痕)



核果の果実の先には2本の花柱痕 2009.1/1

写真 <https://www.hana300.com/fukkis.html> より

## お金に纏わる植物たち；、「万両」・「千両」・「百両」・「十両」・「一両」

何れも秋から冬に小粒の赤い実を熟す。これらの植物は、古来より縁起物とされ 正月の飾りとされる植物たちである。これらが組み合わせられ、目出度い「正月飾り」になる。古い造園の世界では、「千両、万両、有り通し」(大判小判ザックザク、年中お金に困らない)」と、目出度い組合せ庭木としていた。さらには、「万両(マンリョウ)」、「千両(センリョウ)」に、赤い果実をつける「アリドオシ」⇒「一両」、「ヤブコウジ」⇒「十両」、「カラタチバナ」⇒「百両」と洒落て人気がある。時には「億両(ミヤマシキミ)」を加える場合もある。

### ②マンリョウ (万両、別名；ハナタチバナ ヤブタチバナ 学名 *Ardisia crenata* )

ツツジ目サクラソウ科ヤブコウジ属の常緑小低木。花言葉『慶祝』『財産』『徳のある人』  
新エングレー体系、クロンキスト体系ではヤブコウジ科だったが、A P G III体系ではサクラソウ科のヤブコウジ属に組み込まれた。カラタチバナ、ヤブコウジも同様である。



江戸時代に品種改良された古典園芸植物である。白い実の品種や斑入りの葉など多様に品種改良されている。葉縁が縮れ波打つが膨れた部分に葉粒菌(バクテリア)が共生しており空中窒素の固定の役割をしている。花や実を経て種子にも垂直感染し次世代に受け継がれ、発芽率の促進効果も果たすと云う。一方で果肉には発芽抑制物質が含まれ、鳥等に果肉を消化して排泄され初めて発芽可能になる性質がある。また、葉には黒点がある。有色の油腺で被食防止の前駆物質を含む可能性もあるが解らない。原産地：日本(関東以南)～東南アジア・インド

↑2019.12/6 撮影 さいたま市マンリョウ 赤と白の液果様核果 葉縁の凸凹

### ③センリョウ (仙蓼千両 別名クササング 学名 *Sarcandra glabra*) センリョウ目

センリョウ科センリョウ属の常緑小低木。花言葉『富』『祝福』『恵まれた才能』



維管束に「仮導管\*注4」を持つ被子植物としては原始的な植物である。花の構造は非常に特



異的で穂状花序の萼や花弁を欠いた痕跡の様な苞に包まれた1個の雌蕊の子房の脇に1個の雄蕊が付着した形状である。是非観察してみて戴きたい。センリョウ科センリョウ属はセンリョウが1属1種（品種には黄色い実のキミのセンリョウ等がある。）であるが、近い仲間にセンリョウ科チャラン属ヒトリシズカ、フタリシズカがあり、これらも特異的な花の構造をしている。しかし、センリョウは木本だが、ヒトリシズカ、フタリシズカは草本である。受粉については甲虫媒か風媒か両説あり判からない。不思議な植物である。原産地；日本.朝鮮半島.中国.台湾.インド.マレーシア

↑センリョウの赤い核果 2019.12/6 撮影 さいたま市

#### ④カラタチバナ（唐橘、別名；百両 学名: *Ardisia crispa*）



サクラソウ科ヤブコウジ属の常緑小低

木。花言葉『富』『財産』『鋭敏』。

液果様核果は赤色以外に白色または黄色に熟す園芸品種もある。葉縁には波状の鋸歯があり鋸歯間に腺点がある。古典園芸植物として江戸時代は大人気で品種改良され百両単位の値で取引されたことから「百両」の名前が付いたとか、中国の「百両金」という植物に「カラタチバナ」の品種を宛て「百両」とした等の逸話がある。最近は、人気今一步である。

尚、赤い実が唐の橘に例えられのが「カラタチバナ」の名の由来だと云われる。原産地：日本（茨城県・新潟県以西～沖

縄)、台湾、中国

←カラタチバナ 2019.12/6 撮影 さいたま市

#### ⑤ ヤブコウジ (藪柑子、十両 学名: *Ardisia japonica*)

サクラソウ科ヤブコウジ属の常緑小低木。花言葉『明日への幸福』『ふくよかな愛』



↑ヤブコウジ 2019.12/6 撮影 さいたま市

赤い液果様核果は 10-11 月に熟す。日陰や寒さにも強く、栽培が容易なことから観葉植物としても利用されている。「山橘 (ヤマタチバナ)」の名で万葉集に詠まれている古典園芸植物で、江戸時代に品種改良が進んだ。落語『寿限無』の中の「やぶらこうじのぶらこうじ」は「ヤブコウジ」だと云う。江戸時代から続く庶民にとって馴染み深い縁起植物である。乾燥させたものは「紫金牛」(しきんぎゅう)と呼ばれ漢方薬に使われている。

原産地；日本、朝鮮半島、中国、台湾である。

#### ⑥ アリドオン (蟻通し、別名；一両 学名 : *Damnacanthus indicus* C.F. Gaertn.)

アカネ目アカネ科アリドオン属の常緑低木。花言葉は不明

写真ウィキペディア (Wikipedia) ↓より



葉腋に 1 対の細くて長い 1-2 cm の鋭い枝が変化した棘がある。赤い果実は核果。果実の先に 4 つの萼片痕を残す。初めて小生が見たのは、15 年ほど前の屋久島の山中だった。古い造園の世界では、センリョウ、マンリョウと共にこれを植え、「千両、万両、有り通し (=年中お金に困らない)」と洒落込んだとは云うものの、「アリドオン」をさらに、「一両」に洒落るとは恐れ入る。江戸の文化は粋だった。・蟻をも突き通す細い棘を持つと

か、・刺が多いので小さい蟻でないと通れないとか、・秋にできた果実が翌年の花が咲く頃まで残っていることから「在り通し」と云うとか等「アリドオシ」の由来には諸説ある。埼玉県では絶滅危惧 II 類 (VU) である。 以上

## 参考) 注の解説

**\*注 1)** 因みに「干支 (えと)」とは「十干十二支」のことです。今年の「干支」は「庚子 (かのえね)」。 「十二支」は子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥で最初が子 (ね ねずみ) 「十干」は、甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸なので7番目が庚 (かのえ こう)。一つ一つの文字に意味が込められており、それぞれに動物が当てはめられることで、より庶民の生活に馴染んで利用されてきた数量や順序を表す数詞 (例えば年を数える十二支、日を数えるための十干という数詞等) でもある。

日本で古くから暦や時間、方角等の表示に使われている、十干、十二支は、古代中国の殷の時代 (紀元前 15~14 世紀) に誕生し、唐の時代に日本へ伝わったと云う。古くから暦や時間、方角等の表示に使われてきたが、明治以降は廃れつつある。

**\*注 2)** 「陰陽五行思想 (説)」は、中国古代の自然哲学の思想である、 「陰陽」は性質の積極的なものを「陽」とし、消極的なものを「陰」とする。(例えば男・春・奇数・天は陽に、女・秋・偶数・地は陰に分類) その陰陽の流れのバランス概念で善悪の概念ではない。「陽」は「兄 (え)」「陰」は「弟 (と)」と表現される。因みに今年「陽」。 「五行」とは万物は五種類 (木・火・土・金・水) の元素からなり、その元素は一定の法則で互いに影響を与えあいながら、変化し、また循環しているという思想。五行の「五」は五つの元素のことで、「行」は動く、めぐる、という意味 因みに今年「金」

「陰陽五行思想 (説)」とは「陰陽」と「五行」とを組み合わせた宇宙のあらゆる現象は生まれては消え、そして循環するという概念。因みに今年陰陽の「陽」の五行の「金」で「金の兄 (かのえ)」。

**\*注 3)** ねずみは繁殖力の高い動物。子孫繁栄を象徴する存在で、子宝や財を蓄えるシンボルとされる 「働き者」というイメージがあり「寝ず身」で努力するという当て字があるほどです。子 (ね) 年は万物が成長し増えていく時期にあたります。

**\*注 4)** 仮道管は一般的に裸子植物 (&シダ植物) の通水組織である。被子植物の導管に似るが隔壁に穿孔がない。進化的には、仮道管から道管へ進んできたと考えられている。被子植物は主に道管をもっているが、種や部分によって仮道管を持つものもある。被子植物のうちでも比較的原始的とされているもの、例えば、センリョウ科 (センリョウ等)、ヤマグルマ科では仮道管のみで道管はない。但し、裸子植物のマオウやシダ植物のイワヒバ属、トクサ属は道管を持っている一方、殆どの被子植物にも葉の末端の維管束などには仮道管要素がある。維管束植物は殆どが仮道管要素を持つとも云える。

以上

**迎春万歳！ ご隆盛とご多幸を祈願致します。**